II Kings 6:1-31

6章

テーマ:浮かぶ斧の頭と、ドタンでの危険。

6章では、あとふたつエリシャのドキドキするような体験を見ます。エリヤとは違いましたが、エリシャはすばらしい預言者でした。エリヤのミニストリーは公的でした。エリシャのミニストリーはもっと個人的でした。(彼がアラム軍の将軍、ナアマンをどのように扱ったかを見たばかりですね。)エリヤは目覚しい人物でした。彼は天から火や雨を降らせました。エリシャは静かな人でした。彼はスポットライトを避けました。でも、どちらも神さまのときに活躍した神の人でした。

斧の頭

私たちの注目の的は今、エリシャです。I do not think that any miracle so reveals the character of a person and a prophet as the miracle of the floating ax head.浮かぶ斧の頭の奇蹟ほど、ひとりの人とひとりの預言者の性格を明らかにしている奇蹟はほかにないと思います。

(II 列王記6:1)「預言者のともがらがエリシャに、『ご覧のとおり、私たちがあなたといっしょに住んでいるこの場所は狭くなりましたので、』

さて、これはエリシャの人気のほどを物語っています。彼は神学校、つまり預言者の学校で教えていました。学校が大きくなり、もっと広い場所が必要になりました。これは、エリシャがいるためと、また彼の人気のためでした。どのような学校でも、その強さと価値とはそこで教えている人たちの人格と能力によると私は感じます。とりわけクリスチャンの学校で大切なのは、メソッドではなく、人間です。

さて、彼らが何をしたかに注目してください。学校を大きくするために、彼らは言いました。

(II 列王記6:2)「『ヨルダン川に行きましょう。そこからめいめい一本ずつ材木を切り出して、そこに、私たちの住む所を作りましょう』と言うと、エリシャは、『行きなさい』と言った。」

学生たちが自分たちで学校を建てたのです。私たちの時代には、それは普通のことではありません。今日、彼らが学校を終えることができるように、何もかもを学生に与えなければなりません。そしてそれが学生たちにあわなければ、彼らは反抗するのです。でも、これらの学生たちは仕事をするために出て行きました。そしてエリシャは彼らを励ましました。

(II 列王記6:3)「すると、そのひとりが、『あなたもどうか、思い切ってしもべたちといっしょに行ってください』と言ったので、エリシャは、『では、私も行こう』と言って、」

これは新鮮で、どきどきするような節です。これは、魅力あるエリシャの性質を垣間見ることばです。彼が学生たちに人気があったことを示しています。ついでながら、学生たちは普通、学校のキャンパスの外に教師を連れ出したいと思うでしょうか？彼らは教師はそこへ置いていきたいと思うでしょう。でも彼らは、エリシャに一緒に行ってくれるように頼みました。

(II 列王記6:4)「彼らといっしょに出かけた。彼らは、ヨルダン川に着くと、木を切り倒した。」

さて、小さな悲劇が起こります。「小さな」悲劇と言いました。なぜなら、普通の人ならこれはつまらないできごとと呼ぶところだからです。

(II 列王記6:5)「ひとりが材木を倒しているとき、斧の頭を水の中に落としてしまった。彼は叫んで言った。『ああ、わが主。あれは借り物です。』」

なかなか面白いことが書かれています。このできごとは、神さまが私たちの人生の小さなできごとにも関心を持っておられることを明らかにしています。パウロがピリピ人たちに「すべてのことについて祈りなさい」と言ったことを覚えておられるでしょう。パウロは、なにひとつもらさないようにと言う意味で言ったのです。

斧の頭を失くしても、私たちにはたいしたことではありませんが、でもこのかわいそうな学生にとっては小さなことではありませんでした。事実、これはとても大きなことです。現代は小道具の時代で、金物店に行

けばおよそ15種類もの斧の頭を手に入れることができます。でもエリシャの時代は斧の頭はものすごく大切なものでした。なぜなら、鉄製の道具や武器はひどく不足していたからです。そして、もしもその当時のことを何か知りたいなら、Ⅰサムエル記のこの1節を見てください。

（Ⅰサムエル記13：22）「戦いの日に、サウルやヨナタンといっしょにいた民のうちだれの手にも、剣や槍が見あたらなかった。ただサウルとその子ヨナタンだけが持っていた。」

全軍にたったふた振りの剣です！これでこの当時、どれだけ武器や道具が不足していたかがお分かりになるでしょう。ですから、斧の頭を失くしたことは、この若者にとって、とても重大なことであったと理解できます。そしてもちろん、彼はこれを人から借りていたのです。

私は、ほとんどの解説者がこの学生の周りを騒ぎまわって来たことに気づきました。彼らはこの学生の不注意さと、彼が何かを借りていたことを過失とします。もし、彼に罪があるなら、なぜ彼の先生であるエリシャは彼を叱らなかったのでしょう？エリシャは叱りませんでした。エリシャは彼のすべての攻めを免除しました。彼は不注意ではありませんでした。実際、とても注意深かったのです。明らかに斧の頭が取れる危険があり、神さまがそのことをモーセの律法に含まれるほどによく起こったのです。

（申命記19：4－5）「殺人者がそこにのがれて生きることができる場合は次のとおり。知らずに隣人を殺し、以前からその人を憎んでいなかった場合である。たとえば、木を切るため隣人といっしょに森に入り、木を切るために斧を手にして振り上げたところ、その頭が柄から抜け、それが隣人に当たってその人が死んだ場合、その者はこれらの町の一つにのがれて生きることができる。」

神さまがこの定めを作られたのは、これが明らかにかなりしばしば起こることだったからです。さて、彼は自分の前に誰もいないように注意して木を切っていたことで、十分に注意していたことが分かります。彼はもし斧の頭が取れたら、ヨルダン川に入る場所に立っていました。彼は安全な方向を狙って斧を使っていました。

人々は彼がその斧を借りていたことが彼の第二の過失だといいます。私はこの人物を代弁する資格があると思います。彼は神学校の貧乏学生だったので、この当時斧を自分で買うことができなかったのです。私が神学校時代にキャデラックを持つことができなかったのと同じです。彼はただ、買うことができなかったのです。彼は斧を借りなければなりませんでした。私は彼がこのふたつの点で批判されるべきではないと思います。

事実、私には質問があります。誰がこの学生に、頭が外れるような古い斧を貸したのでしょう？私はその人と話がしたいですね。私はその人は、今日ならお古の洋服や古いクリスマスカードを宣教師たちにあげて、自分は主に仕えていると思っている人と同じような人だったことでしょう。

さて、この若者は悩みました。彼は持ち主に弁償できないのです。彼は斧なしに持ち主に対面して、どうすれば良いか分かりませんでした。さて、エリシャの関心に注目してください。
「神の人は言った。『どこに落としたのか。』」
ちょっとここでストップしましょう。なぜなら今まで、
「エリシャは預言者なのに、なぜそんなことを聞いたのですか？彼は斧の頭がどこに落ちたかを知っていそうなものじゃないですか」
という人たちがいたからです。彼は知っていたし、それ以外のことも知っていました。彼はこの若者を試す必要があることを知っていました。神さまの御霊によって、エリシャは彼を試す必要がありました。この若者が、斧の頭が正確に水のどこに落ちたかを知っていたことに注目してください。彼が不注意だ、などとは言わないでください。エリシャは、試すためだけでなく、もうひとつの理由で訊いたのです。神さまの御霊は、20世紀にこの奇蹟を批判する人々がいることを知っておられました。そして、彼らがほかのすべての奇蹟を説明してきたように、彼らは次のように言うだろうことを知っておられました
「まあ、結局のところ、水が澄んでいてその斧がどこにあったか、誰でも見ることができたわけさ。」

エリシャがした質問は、水が澄んでいた、と言っているすべての人を排除します。もしあなたがヨルダン川について何か知っているなら、ヨルダン川が泥水だと言うことを知っておられるでしょう。この川について、多くのロマンチックなですばらしいことを聞いて来ましたが、私にとってはこの川は私が見た中で一番がっかりしたものです。汚染された川、泥水の小川、汚いもの、それがヨルダン川です。ヨルダン川は泥水でしたから、エリシャは「どこに落としたのか」と言ったのです。若者はどこに落ちたかをはっきり知っていましたが、それを見ることができないので、取り戻すことができませんでした。水は澄んでは“いません”でした。さて、何が起こったか、見てください。

（II 列王記6：6）「神の人は言った。『どこに落としたのか。』彼がその場所を示すと、エリシャは一本の枝を切って、そこに投げ込み、斧の頭を浮かばせた。」
これは奇蹟でした。そしてこれを説明することはできません。これはひとつの奇蹟です。センセーショナルでもないし、火の戦車にのって天に上っていくほどに壮観でもありません。でも単純で偉大です。鉄が浮くのは奇蹟です。すべて知られている物理的な法則に反します。最初の鉄の船が進水してから、今は鉄と鋼鉄の船が七つの海に浮かんでいます。それは奇蹟ではありません。でも、ヨルダン川の川底にあった斧の頭がコルクのように浮かぶのは奇蹟です。びっくりするようなことでもセンセーショナルなことでもありません。簡単なことです。これがエリシャのやり方でした。エリヤなら、絶対にこのようにはしなかったことでしょう。事実、エリヤはそのようなことで妨げられはしなかったと思います。エリヤなら、
「若者よ。忘れてしまいなさい」
と言ったことでしょう。でも、エリシャはそうはしませんでした。

泥水のヨルダン川の川底で静止している斧の頭が、びっくりすることには、水の表に上げられ、よみがえらされ、持ち主に返され、柄に付け直され、もう一度役に立つように実利的、機能的にされました。これは本当に、ほかのものよりも偉大な奇蹟です。なぜなら、ここに、今日の私たちに対する、ものすごい霊的なメッセージがあるからです。今日の人間はあの斧の頭のようです。柄から取れてしまっているのです。彼は落ちました。完全に堕落しています。

エリシャは枝を切りました。彼はその枝を死の水に投げ込みました。この枝はキリストの十字架です。主はその十字架に降りて来られ、あなたや私のために、死の水に入っていかれたのです。

（I ペテロ2：24）「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」

人間は今日、キリストを通して死とさばきの水から上がることができます。自分のための神さまのご計画と目的という柄に付け直されることができます。そして神さまのご計画に組み入れられることができるのです。パウロは証言します。

（ピリピ4：13）「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」

そしてさらに、こう書いています。

（ピリピ3：13－14）「・・・ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」

だれでも、これ以上目的のない、役に立たない人生を送る必要はないのです。人生の目的が何もないことが、文字通り何千という人々を自殺に追いやっています。先週、6人の大学生が自殺しました。その全体の説明は、「生きている価値がない」ということでした。もちろん、もしあなたが泥水のヨルダン川のそこに沈んだ古い斧の頭であるなら、生きている価値はありません。キリストがあなたをご自分の十字架、つまりあなたや私のための主の死によって引き上げてくださり、主のご計画と目的にもどしてくださったときに、人生は価値のあるものになるのです。

まだ21歳になっていない若者（訳注：アメリカでは、21歳で本当に大人とみなされます）が私に言いました。
「私の人生は失敗です。」
私は彼に言いました。
「君の人生はまだ始まってもいないじゃないか。それなのに、失敗だなんて！」
今日、私たちはどれほど神さまを必要としていることでしょう。今日の最大の奇蹟は、月に行くことではありません。火の戦車に乗って天に上げられることでさえないのです。むしろ、私たちがまだ罪人であったときにキリストを信じて、天国の一番高いところに行くことなのです。この世の泥とぬかるみから引き上げられて、私たちの人生に意味を与えられ、神さまのために生きることができるようになることこそが、最大の奇蹟です。

（II 列王記6：7）「彼が、『それを拾い上げなさい』と言ったので、その人は手を伸ばして、それを取り上げた。」
主はあなたのために死なれたのですから、あなたがしなければならないことは、ただ信仰の手を差し伸べて、それを取り上げることです。主は、あなたを引き上げるために、よみがえられたのです。あなたの今あるところからしなければならないことはただひとつ、信仰の手を伸ばして主を信じることです。

ドタンでの危険

次のエピソードは、とても聞きなれた響きから始まります。まるで新聞の朝刊のページから出てきたようです。「アラムの王がイスラエルと戦っていたとき」彼らは長い間戦争をしていました。実際、そのときでさえも、もう古い争いでした。現代のイスラエルとアラブ世界の争いには、はっきりした聖書の背景があるのです。

さて、状況を見てください。
（II 列王記6：8－11）「アラムの王がイスラエルと戦っていたとき、王は家来たちと相談して言った。『これこれの所に陣を敷こう。』そのとき、神の人はイスラエルの王のもとに人をやって言った。『あの場所を通らないように注意しなさい。あそこにはアラムが下って来ますから。』イスラエルの王は神の人が告げたその場所に人をやった。神の人が警告すると、王はそこを警戒した。このようなことは一度や二度ではなかった。このことで、アラムの王の心は怒りに燃え、家来たちを呼んで言った。『われわれのうち、だれが、イスラエルの王と通じているのか、あなたがたは私に告げないのか。』」
アラムの王は動揺しました。なぜなら、彼が立てるひとつひとつの計画と、彼が行くひとつひとつの場所が、すべてイスラエルの王にばれてしまっていたからです。彼は、自分の陣に、スパイがいると結論しました。彼は自分の軍隊を集め、裏切り者を暴き出そうとしました。
「お前たちのうちの誰が、イスラエルの王のために働いているのか？」
正直、裏切り者は誰もいませんでした。彼らすべてが王に忠実でした。

（II 列王記6：12）「すると家来のひとりが言った。『いいえ、王さま。イスラエルにいる預言者エリシャが、あなたが寝室の中で語られることばまでもイスラエルの王に告げているのです。』」
預言者エリシャはアラムの王の寝室までも「盗聴し」、彼が言ったすべてのことを知っていました。そして、この当時彼らを「盗聴した」方法は、主がそれを彼に明らかにされたというものです。

そこで、アラムの王はエリシャを亡き者にしようと決めました。王は最初に、エリシャがいるところを偵察する人々を遣わし、彼らはエリシャがドタンにいることを確かめました。ドタンはエルサレムの北、6マイルほどのところです。ドタンとは「ふたつの井戸」の意味で、良い牧草地があり、羊の群れが連れて来られるところでした。ここ数年来、ホウィートン大学のジョセフ・フリー博士（Dr.Joseph Paul Free：1911－1974。教育者、考古学者、著作者、講演者、そしてクリスチャンの信徒リーダー。
archon.wheaton.edu/ ?p=creators/creator&id=48 より）が、その場所の発掘に取り組んでいます。それほど見るものはないと聞いています。なぜなら、そこが有名な場所になったことはないからです。それでも、この一時期、エリシャの本拠地がこの場所にありました。アラムの王は軍隊を送り、この場所をすっかり取り囲んでしまいました。エリシャのしもべが、朝になっておそらくこれらふたつの井戸のひとつから水を汲もうと

出てきました。このふたつの井戸は今もそこにあります。彼は周りを見て、ドタンの町がアラム軍に取り囲まれていることに気づきます。ひとつのことは確かです。彼は愕然とします。彼は中に戻ってエリシャに報告します。彼はエリシャに言います。
「ああ、ご主人さま！私たちはどうしたら良いのでしょう？町は取り囲まれています。降参するほうがましでしょう。私たちに望みはなさそうです！この状況の下で、何ができるというのでしょう？」

（II 列王記6：16）「すると彼は、『恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから』と言った。」
それはむしろ非現実的でした。なぜなら、ここにシリヤの軍隊が外にいて、エリシャは彼のしもべとたったふたりだけでした。そしてそのしもべは、死ぬほど怖がっていたのです。そこでエリシャは祈りました。彼の祈りは興味深いものです。

（II 列王記6：17）「そして、エリシャは祈って【主】に願った。『どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。』【主】がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。」
質問が出てきます。これは神さまの者たちを取り扱う、神さまの定まった方策でしょうか？
　私は今日、とても多くのクリスチャンが偉大なエスケープ・アーティスト（訳注：escape artist とは、鎖などで縛られたり、箱に入れて鍵をかけられたりしている状態から脱出する、一種の奇術師）になっていることに気づきました。彼らは一種の霊的なフーディーニです。（訳注：Harry Houdini：1874年3月24日－1926年10月31日。ハンガリー生まれ、アメリカの奇術師、脱出術師、スタントマン、俳優で映画監督。センセーショナルな脱出の舞台で有名。ウィキペディアより）彼らは神さまが自分たちを助け導いてくださった、奇跡的なできごとを話すことができます。でも、そのほかの多くの聖徒たちは、恥ずかしさに頭をたれて、言います。
「私はそのような経験はしたことがありません。神さまからのそのような導きも受けたことがありません。きっと、私が神さまとの接触を失ってしまっているか、それとも神さまはまったく私を支持してはおられないのでしょう。」
ドタンに戻ってみましょう。答えはここにあると私は信じます。ドタンは聖書の中に二度しか出て来ません。それには確かな理由があると私は思います。
　もうひとりの人物がドタンに近づきます。若者です。事実、彼は17歳で、危険と運命がそこで彼を待っています。実際、彼は無力で何も疑っていない動物がわなに向かっていくように歩いています。私は彼に警告したい気持ちになります。
「ドタンに行ってはいけないよ！」
でも、あの愚かな「フーディーニ」クリスチャンは、このように言うのです。
「先生。心配する必要はありませんよ。彼に危険が来るなどということはありません。彼はドタンで痛い目にあうことなどありませんよ。彼は来週には家にいます。だって、神さまが彼を助けられるのですから。結局のところ、ドタンの周りには火の戦車が取り巻いているのです。彼は助けられますよ。」
そうでしょうか？ヨセフの兄弟たちは彼に対して陰謀を企みました。彼らはヨセフを殺したいと思ったのですが、ちょっと冷静になったときに、兄弟の中で賢い者が、彼を奴隷に売ろうと言い出します。奴隷に売られることは当時、死ぬよりも悪いことでした。奴隷に売れられることは、生き地獄でしたが、この17歳の若者に起こったのはまさにそれでした。そして、彼は神の人だったのです！火の戦車はどこにありますか？火の戦車が目に見えないからといって、そこにないという意味ではありません。火の戦車はそこにあるのです。私は、奇蹟を行ったエリシャの人生よりも、ヨセフの人生に神さまの御手の証拠を見ますが、それでも神さまは一度もヨセフに現れませんでしたし、ヨセフのために奇蹟も行われませんでした。でも、神さまはこの災害と思われることを用いられ、ヨセフは人生の終わりに、それを認めています。彼は兄弟たちにこのように言うことができました。

（創世記50：20）「あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。・・・」

そしてドタンには火の戦車があったのですが、別の仕方で使われるべきものだったのです。

アラムの兵たち、盲目にされる

（II 列王記6：18）「アラムがエリシャに向かって下って来たとき、彼は【主】に祈って言った。『どうぞ、この民を打って、盲目にしてください。』そこで主はエリシャのことばのとおり、彼らを打って、盲目にされた。」

エリシャはとても不思議なことをしました。彼は神さまに、アラムの軍隊を打って、盲目にしてくださいと祈り、神さまはそのとおりにされました。そののち、エリシャは彼らすべてをサマリヤに導き、自分は彼らをエリシャのいるところに導いているのだ、と言いました。彼らがサマリヤに着いたとき、エリシャは彼らをサマリヤの王に引き渡しました。王は彼らを殺したかったのですが、エリシャは言いました。

「殺してはいけません。彼らに食べさせ、送り返しなさい。」

（II 列王記6：23）「そこで、王は彼らのために盛大なもてなしをして、彼らに飲み食いをさせて後、彼らを帰した。こうして彼らは自分たちの主君のもとに戻って行った。それからはアラムの略奪隊は、二度とイスラエルの地に侵入して来なかった。」

エリシャによって代表された、イスラエルの神さまの力と慈悲深さが、アラムの王を本当に揺すぶったのでしょう。彼はイスラエルに対する戦いを放棄しました。ところが、次のエピソードで見るように、のちになってベン・ハダデ（ついでながらこれは正規の名前というよりは、肩書きです）が再びサマリヤを包囲攻撃します。

ベン・ハダデ、サマリヤを包囲攻撃する

（II 列王記6：24－25）「この後、アラムの王ベン・ハダデは全軍を召集し、サマリヤに上って来て、これを包囲した。そのころ、サマリヤには、ひどいききんがあった。そのうえ、彼らが包囲していたので、ろばの頭一つが銀八十シェケルで売られ、鳩の糞一カブの四分の一が銀五シェケルで売られるようになった。」

飢饉があまりにもひどく、ろばの頭がとんでもない値段で売られていました。ろばの頭にどれほどの肉がついていたでしょう？おそらくゆでて、スープかシチューにでもしたのでしょう。彼らは、本物のインフレを経験していました！

次の数節には彼らが実際に自分たちの子どもを食べていたという恐ろしい事実が明らかにされています。絶望的な食糧難のためです。

（II 列王記6：31）「彼は言った。『きょう、シャファテの子エリシャの首が彼の上についていれば、神がこの私を幾重にも罰せられますように。』」

なぜ王がこの包囲攻撃の恐ろしさをエリシャのせいにしたのかは分かりません。おそらく王は、奇蹟的に食物を提供するのはエリシャの力であると考えており、彼がそうしないために王は彼を処刑しようとしていたのでしょう。

エピソードは、次の章に続きます。これは、この人エリシャの人生で、もうひとつのドキドキするようなできごとです。